

ライフサイクル全体で算出

構築していく。

環境負荷の把握をめぐっては、温室効果ガス排出量に加えて、水資源の負荷を定量化する「ウォーターフットプリント」など、他の指標にも注目度が高まってきている。あらゆる指標を使って評価する仕組みができていくことで、材料の選択やエネルギーの使用といった各段階で環境負荷を一層低減する取り組みのほか、さまざまな環境規制に対応した製品開発が進みそうだ。

東京都大学環境情報学部の伊坪徳宏准教授の研究室は富士通と共同で、製品のライフサイクル全体での環境負荷を網羅的に評価するための原単位データベース(D B)を作成した。環境負荷に関する指標としてはこれまで温室効果ガスの排出量が重視されてきたが、今回のD Bには水質汚濁物質や産業廃棄物などの項目を盛り込んだ。電機や食品などさまざまな分野への適用が可能で、環境負荷を一層低減した製品開発に役立つ。

環境負荷を網羅的に評価(P)の検討が進んでいる。欧州連合(EU)の行政機関である欧州委員会が早ければ2013年の導入を目指している。欧州委員会の案ではオゾン層破壊や

生毒性など14の環境影響を評価項目とし、欧州各国政府のグリーン調達要件となる可能性が高い。今回のD Bは、こうした動きにいち早く対応するために産業連関表を基に作成。水質汚濁物質、産業廃棄物、低放射性廃棄物、鉍物

を評価項目とした。D Bを活用することで、例えば商品を生産する際に浮遊物質などの発生量と環境負荷を客観的な数値として把握できる。今後は、化学物質などの項目を加えてD Bの拡充を図り、環境負荷をより総合的に算出する仕組みを

を評価項目とした。D Bを活用することで、例えば商品を生産する際に浮遊物質などの発生量と環境負荷を客観的な数値として把握できる。今後は、化学物質などの項目を加えてD Bの拡充を図り、環境負荷をより総合的に算出する仕組みを

製品の環境負荷評価

東京都大・富士通がDB

水質汚濁など項目に